

聖教などともいわれている。

以上の諸点をもととして、今回は、鸞堂における状況、その内容についての具体的な経験をふまえて報告し、鸞文からみる民間療法的一端を発表する。

(順天堂大学産婦人科)

和田耕作

安藤昌益の臨床医学と『万病回春』

江戸中期の特異な思想家安藤昌益(一七〇三—一七六二)は、稿本『自然真営道』百巻のうち、五十八巻から百巻までを、医学論に費していたが、そのすべては関東大震災によって灰燼に帰してしまった。

その医学論を復原する関連資料としては、『進退小録』『自然精道門』『神医天真論』(以上、『安藤昌益全集』第十四巻に収録)、『真斎謾筆』(『安藤昌益全集』第十五巻に収録)などがある。なかでも浩瀚な書物である『真斎謾筆』は、昌益の臨床医学の全貌をうかがうことのできる貴重な資料である。

では、昌益の臨床医学はいかにして成立したのであろうか。このたび、『真斎謾筆』と『万病回春』を比較検討した結果、『万病回春』が昌益医学の成立に大きく関わって

いることが明らかとなった。それは、昌益医学が『万病回春』の亜流であるということの意味するものではない。昌益は、『万病回春』を乗り越えるべき「古説」として、独自の臨床医学を構築したのである。『真齋謾筆』の中で、『回春』の名が示されているのは一カ所（『全集』十五卷、三二六頁）だけである。しかし、「古説……」として何度も出てくるところの「古説」とは、多く『万病回春』を指していることが判明した。

『真齋謾筆』と『万病回春』とを比較考究することにより、昌益医学の特質を明らかにすることができる。

昌益医学の構成と『万病回春』の構成とを比較してみると次のことがわかる。

昌益の「衆病論卷」（七十三卷）は、ほぼ『万病回春』の卷二から卷五の項目に沿って述べられているが、ここでは病名に対する簡単な解説と感気（脈のこと）のみを述べ、具体的病論と処方については、「精道門卷」（八十一卷）、「頭面門卷」（七十九・八十卷）、「外風門卷」（八十二卷）、「内風門卷」（八十三卷）、「外滋門卷」（八十四卷）、「内滋門卷」（八十五卷）、「外熱門卷」（八十六卷）、「内熱門卷」（八十七卷）、「外

蒸門卷」（八十八卷）、「内蒸門卷」（八十九・九十卷）、「外涼門卷」（九十一卷）、「内涼門卷」（九十二卷）、「外燥門卷」（九十三卷）、「内燥門卷」（九十四卷）、「外寒門卷」（九十五卷）、「内寒門卷」（九十六卷）、「外湿門卷」（九十七卷）、「内湿門卷」（九十八卷）という独自の分類構成の中で詳述されている。

昌益の「婦人門病論卷」（七十四・七十五卷）、「小兒門卷」（七十六・七十八卷）は、ほぼ『万病回春』の卷六（婦人科）、卷七（小兒科）の記述項目に沿って論じられている。

昌益の「外瘡門卷」（九十九卷）、「内瘡門卷」（百卷）は、『万病回春』の卷八の内容に対応している。

『万病回春』の卷一に対応する内容は、『真齋謾筆』にはみられない。薬性に関することが多いので、おそらく「薬性紀卷」（六十二・六十七卷）に譲ったものと思われる。

『真齋謾筆』の薬方と『万病回春』の薬方とを比較してみると、次のことがわかる。

昌益の薬方名は、ほとんどが薬効による命名で、構成薬物名によるものはきわめて少ない。また、その名はたいへん独創性に富んでいる。『万病回春』の薬方名も薬効によるものが多いが、主薬と薬効を合わせたものや主薬の数を

かかげたものなどさまざまである。構成薬物名によつたものの多い「古方」に比較すれば、昌益の薬方名は「後世方」的ではあるが、きわめて独創的なものである。

昌益の薬方における生薬の数は、『万病回春』に比べて少ない。『万病回春』の生薬数は十種以上のものが多いが、

昌益の生薬数は九種（八味＋甘草）のものが非常に多い。

「八氣互性」の「八」という数によつて生薬数を制限したものと解される。四、五種の生薬を中心とする「古方」の薬方よりは多く、「後世方」的薬方であるといえるが、昌益は「古説」（『万病回春』）に対して、独自の薬方を構築したと解釈すべきである。

昌益の薬方の現代的有効性については、今後、臨床家によつて検証されることを期待したい。

昌益の医学論の立場については、すでに述べておいた（拙論「安藤昌益の医論と『古方』の解釈をめぐって」『安藤昌益研究会会報』第七号、一九八〇年十月）が、基本的に『内経』『本草綱目』『万病回春』などの「古説」批判によつて、真営道医学を形成し、体系的に展開したものと見える。

（医学書院）

吉益東洞・南涯・北洲、三代の

門人録

—「奥田本」について—

矢 数 道 明

一
大著『京都の医学史』編集委員会では、資料として吉益家門人録を捜し需めてきたが、適当なものが見当たらず、載録できなかつたという。先頃その編集委員の一人、杉立義一氏より、もし吉益家門人録と名づけられたものがあれば公表して欲しいと、北里東医研の医史文献研究室を通じて希望が寄せられてきた。

『京都の医学史・資料篇』の中の「医家門人帳」を担当された杉立氏は、伊良子・山脇・荻野・賀川・小森家などの門人帳を詳しく報告されているが、吉益門人帳についての記載はないようである。

また、呉秀三編『東洞全集』にも、東洞の家族や門人の